

統計をみよう

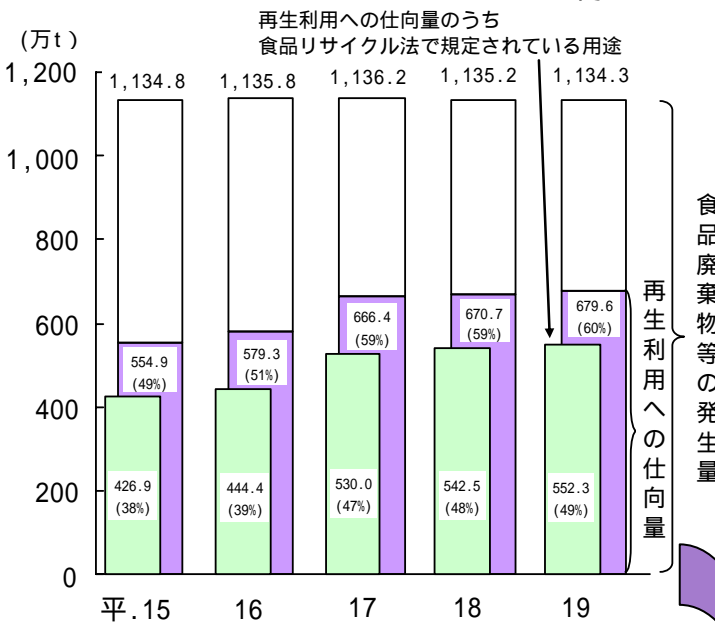
食品産業のリサイクル資源、
家庭での食品ロスの実態

食品循環資源の再生利用等実態調査結果の概要(平成19年度)
平成19年度食品ロス統計調査(世帯調査)結果の概要

平成21年3月31日公表
平成20年9月2日公表

食品循環資源の再生利用等実態調査結果の概要(平成19年度)

図1 食品廃棄物等の発生量と再生利用への仕向量の推移



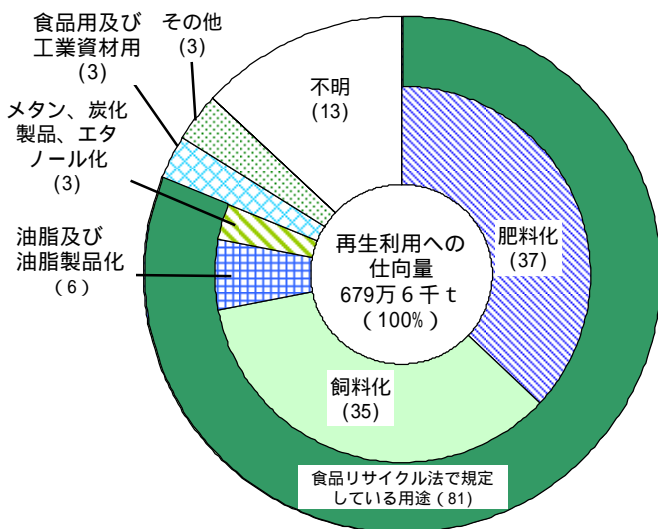
食品廃棄物等の年間発生量は
前年に比べて9千t減少

食品循環資源の再生利用への
仕向け量は
前年に比べて8万9千t増加

再生利用率 60%
食品リサイクル法で規定してい
る用途の再生利用率 49%
前年に比べて共に1%増加

再生利用とは、食品廃棄物を肥料・飼料などの食品循環資源として利用、又は利用するため譲渡することをいう。
食品リサイクル法で規定している用途とは、肥料、飼料、油脂及び油脂製品、メタン、炭化製品(燃料及び還元剤)、エタノールの原材料として再生利用することをいう。

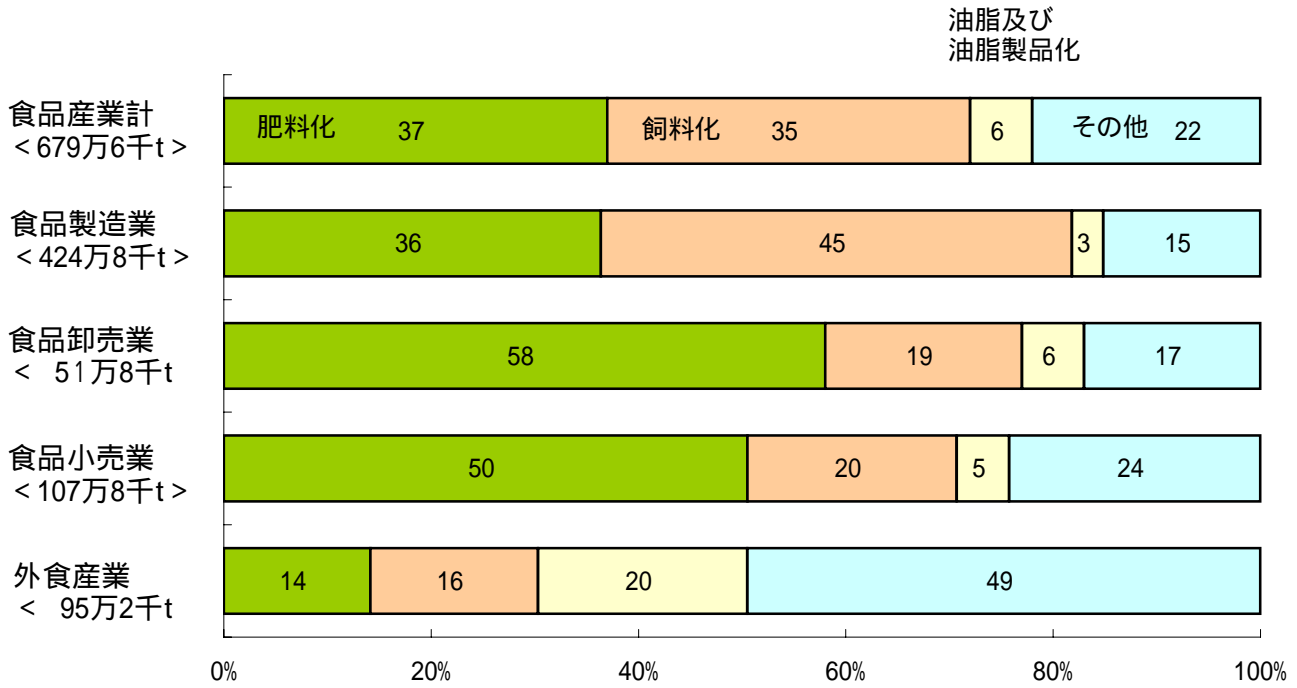
図2 食品循環資源の再生利用の用途別仕向量割合



再生利用の用途別仕向け量割合は
肥料化、飼料化で7割

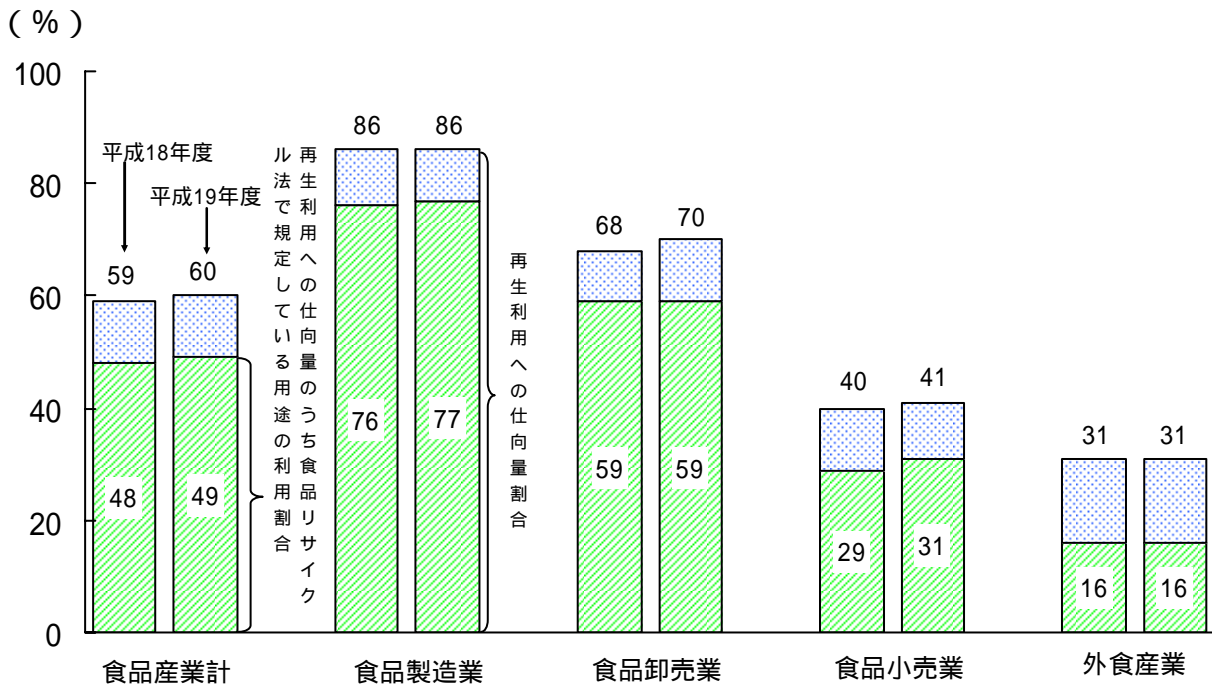
- 1位 肥料化 37%
- 2位 飼料化 35%
- 3位 油脂及び油脂製品化 6%

図3 再生利用の業種別用途別割合



注: < > は、再生利用量への仕向け量。
 「その他」は、メタン、炭化還元剤、エタノール化、食品用、工業資材用など。

図4 食品廃棄物等の再生利用への仕向量割合



食品循環資源の再生利用等の促進に関する基本方針に規定されている、業種別再生利用等実施率目標(平成24年度までに)

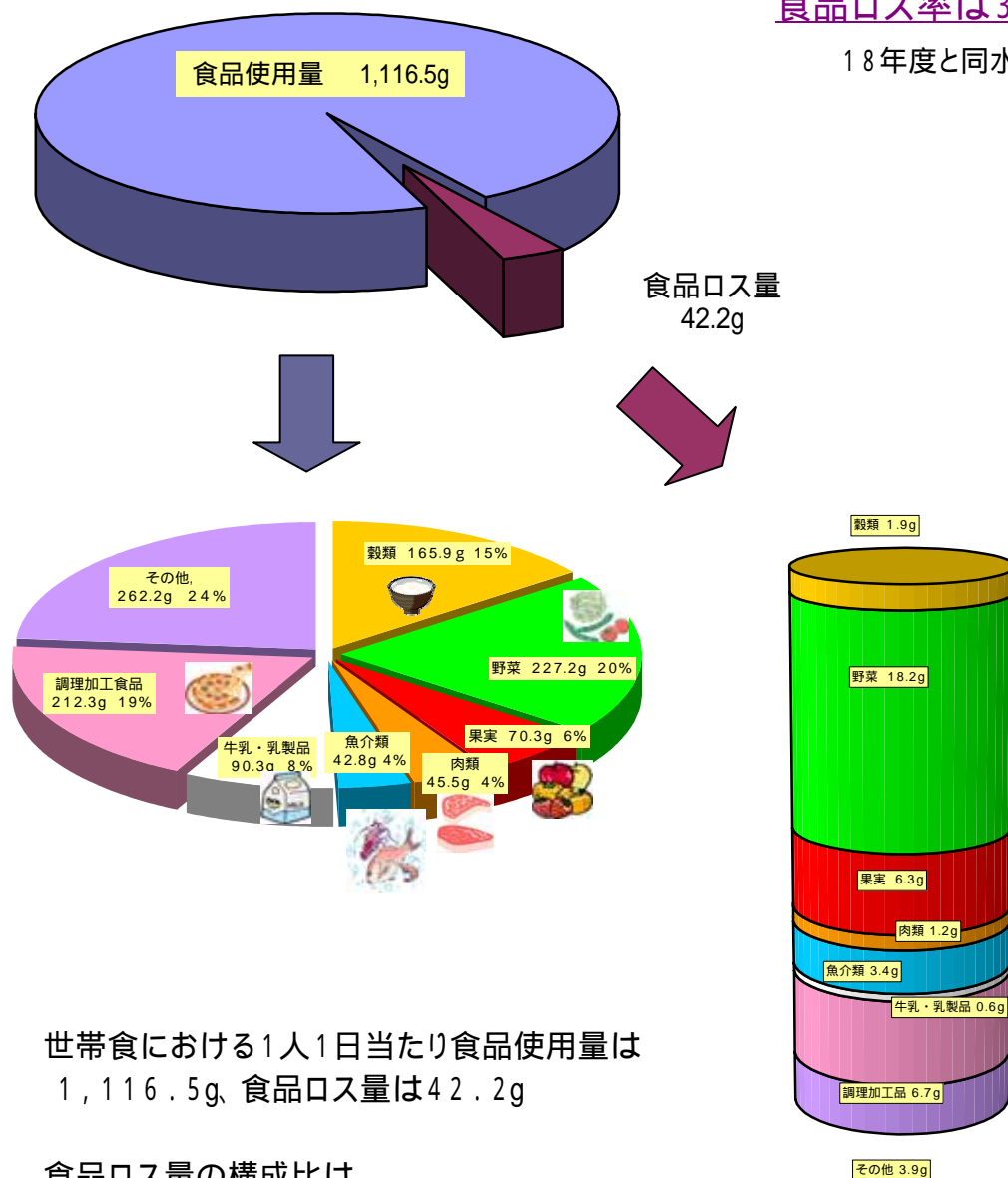
食品製造業	85%	食品小売業	45%
食品卸売業	70%	外食産業	40%

平成19年度食品ロス統計調査(世帯調査)結果の概要

本調査は、世帯員構成別に抽出した1,000世帯を対象に、平成19年度(平成19年6月、9月、12月及び20年3月)の各調査月において、連続した1週間の食事状況を調査した結果である。

図5 食品類別使用量及び食品ロス量

世帯食における
食品ロス率は3.8%
18年度と同水準



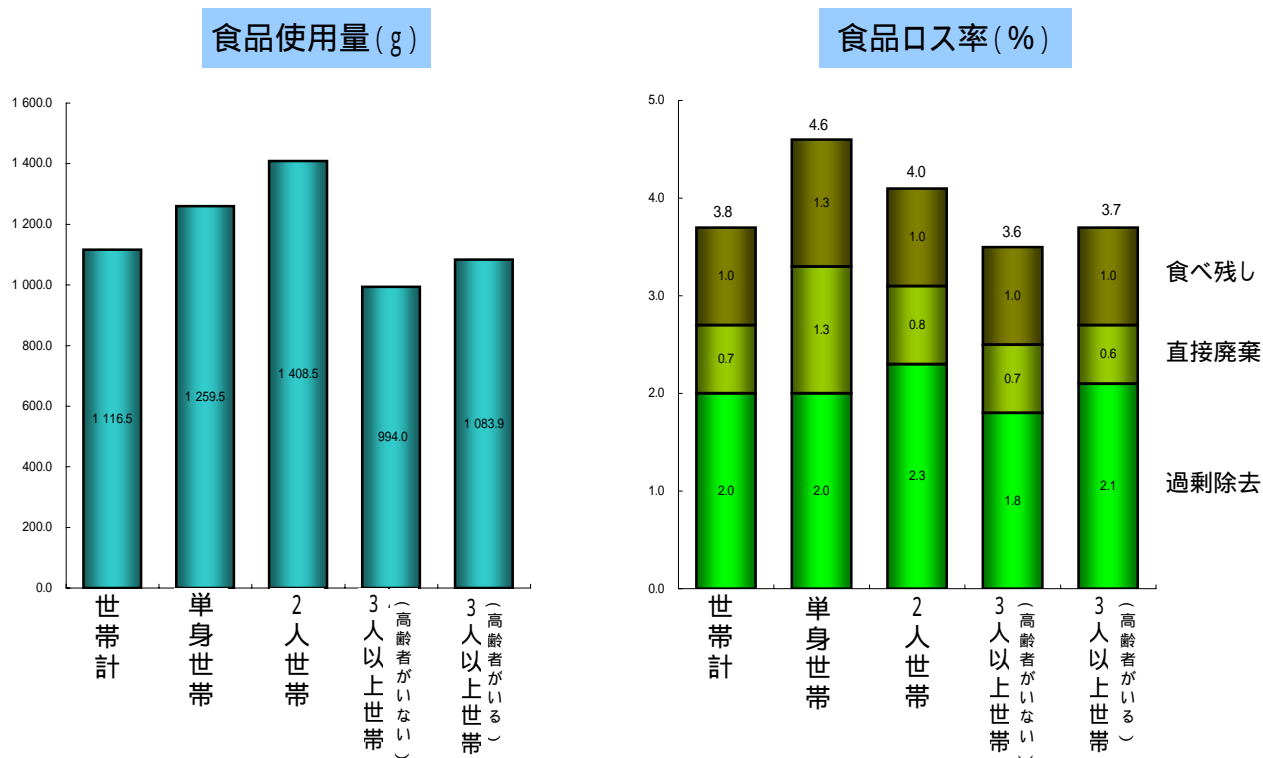
世帯食における1人1日当たり食品使用量は
1,116.5g、食品ロス量は42.2g

食品ロス量の構成比は、
野菜、果実類、魚介類の生鮮食料品で約7割

食品ロスとは、純食料のうち食品の廃棄や食べ残されたものをいう。
純食料とは、農林水産省「食料需給表」の純食料に相当するもので、国内消費仕向量から飼料用等食用以外の仕向け量、輸送、貯蔵中の減耗量を除き、りんごの皮、魚の骨などの不可食部分を除いた可食部分の食料をいう。

$$\text{食品ロス率}(\%) = \frac{\text{食品ロス量}}{\text{食品使用量}} \times 100$$

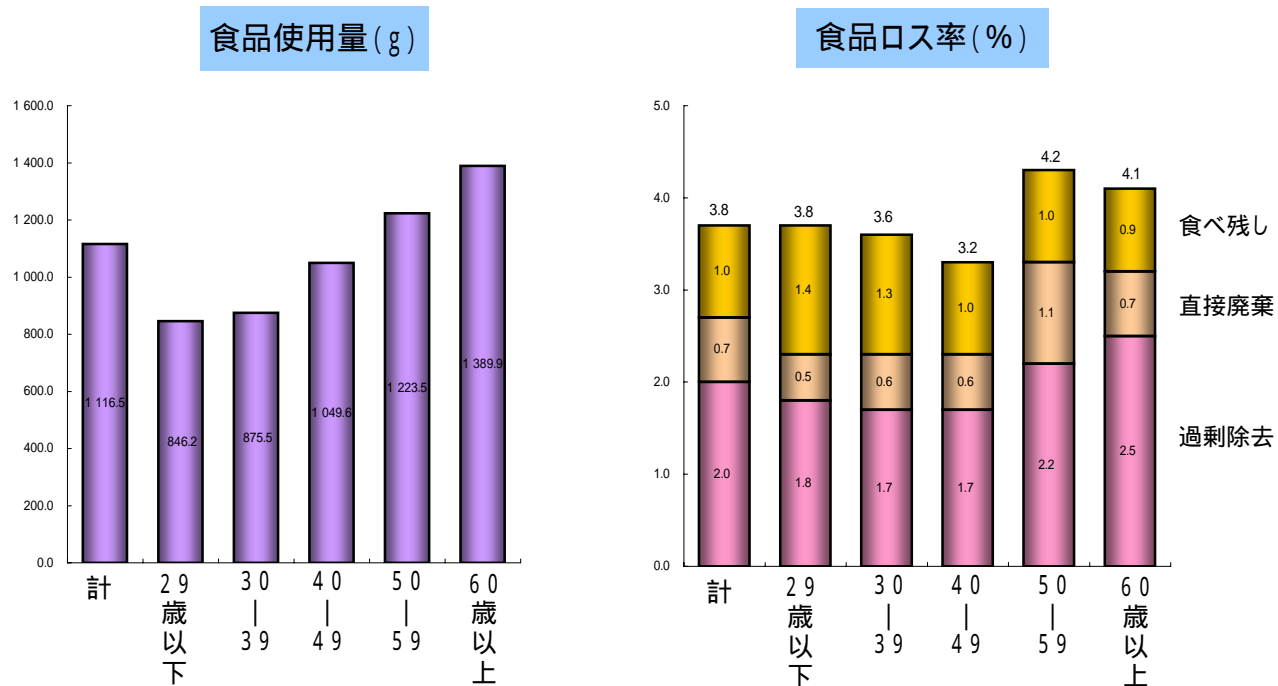
世帯員構成別



食品ロス率は「単身世帯」が4.6%と最も高い。

また、賞味期限切れなどで、そのまま廃棄した「直接廃棄」が他の世帯員構成に比べて高い。

食事管理者の年齢階層別



食品使用量は食事管理者の年齢階層が高くなるほど多い。

食品ロス率は50歳以上の年齢階層が高い。